道

発　行　真言宗豊山派　霊松山歓喜院
金　剛　寺

〒371-0241　前橋市苗ヶ島町 1147
TEL 027(283)6918 FAX 027(283)6815
http://www.raijin.com/kongouji/

サクラの花

高野山真言宗慈眼院　住職　橋爪　良真

今年の桜の開花は例年になく早く、また一気に満開となり、さらにあっという間に散ってしまいました。もしかしたら花見の機会を逸してしまった方も多いのではないかと思います。古来日本人は桜をこよなく愛し、その短い花のいのちに儚い美しさと清清しさと潔さなどを感じながら、花見の宴を催し桜と時空を共に有することによりその豊かな感性を育んできました。

咲くもよし　散るもよし
花は嘆かず　今を生きる

坂村真民さんの詩の一節ですが、芽吹きから蕾、開花、満開、桜吹雪、新緑、夏の緑、桜紅葉、落葉、冬の幹と枝だけの姿、と一年を通して変化していく桜の姿は美しいと思わざるをえません。私たちは、桜の健気に一生懸命に生きていることを知っています。そして年に一度、春には晴れ姿を見せてくれ元気づけてくれることを待ち望んでいます。

真言宗の経典「理趣経」のなかの言葉「初中後善」（初めも善く中ほども善く終わりも善し）を思い起こさせます。

そのように桜は、自分の日常の心境や人生観などを重ね合わせて詩歌などに詠み込まれることの多いきわめて情緒的な対象物ですが、このデジタルな情報化社会の現代でもそれはあまり変わりはないようです。あまり厳密に調べた訳ではありませんが、21世紀以降さくらに関する歌（ソング）が多いように思われます。きっかけはＮＨＫの朝ドラ「さくら」かもしれません。森公美子さんが歌うそのドラマの挿入歌「桜景（おうけい）」も日本的味わいのあるなかなかいい歌です。その直後、森山直太朗さんが「さくら」をヒットさせましたし、その後は続々と堰を切ったように桜の歌のオンパレードです。

余談ですが今私が気に入っているのは昨年春にリリースされた半崎美子さんの「サクラ～卒業できなかった君へ～」という、突然死んでしまった片思いの男子のことを、桜舞う卒業のときに思い出している切ない青春の歌です。

だいたい多くの歌は「卒業」「初恋」「失恋」「別れ」などという若者向けの感傷的な内容となっていますが、それでもそこから何かしら「永遠性」に通じるものを感じとれるような気がするのは深読みしすぎでしょうか。切なさや悲しみにじっと耐えることによりやがてその苦悩を乗り越えていく日本人特有の感性に思えてなりません。

15年前に亡くなった父である先代住職の句碑が高崎観音慈眼院の境内に建っています。かつての俳友たちが父の三回忌に建ててくださったものです。

前（さき）つ世も
先（さき）つ世も
また　さくらみち

というもので、少々むずかしい句であるともいえますが、どうぞ解釈はご自由にしていただきたく存じます。自分も僧侶でもありますので、個人的にはこの句は、「輪廻」の迷路を彷徨いつつも、それでも常に心の自由と智慧の灯りを求め、「ほとけの方向」を願い続ける観音信仰への憧憬を吐露したものと考えています。

かの西行法師が「願はくは花の下にて春死なむその如月の望月のころ」と満月のお釈迦様の入滅日に桜の花の下で死にたいものだと詠んだのは有名ですが、他にも「仏にはさくらの花をたてまつれわがのちの世を人とぶらはば」と自分の死後は桜の花を手向けてほしいとも詠んでいます。

多くの人の解釈では、この「仏」というのは亡くなって仏となった西行自身のことであると言われています。しかし高野山で修行した真言僧でもある西行がそんな偉そうなことを言うでしょうか。これはおそらく、「私が死んだ後、私を供養してくさるのなら、何よりもまず仏さまに桜の花をお供えしてください。」ととるべきでしょう。つまり仏さまを供養することによって生じた功徳を亡き西行のためにわずかでも手向けてもらえれば嬉しいのだ、と考えた方が自然だと思います。

西行にしてみれば桜の花は、仏さまにお供えするのにふさわしい花であるのです。西行も父も桜が好きでした。人が仏さまの供養にと優しく桜の花をお供えする姿を心から喜んでいるのでしょう。父が「さくら径」を歩み続けるのも何となく合点しました。桜ソングに永遠性を見いだしたくなるのもなるほどと思います。日本人が桜を好きなのもどこかで仏の世界を感じているからなのでしょう。

樹齢百年のソメイヨシノと見事な垂れ桜で仏さまの世界を荘厳されている志田洋遠御住職の金剛寺さまが「東国花の寺百ヶ寺」にご参加されますことをお待ち申し上げております。

総本山長谷寺・室生寺三ヶ寺合同参拝に参加して

相應寺　石井　一義

十一月二十一日朝五時の暗闇の中、集合場所の新里ＪＡへ向かう。バスが待っていた。バスに乗り込み、暖かさにホッとする。龍興寺を経由して金剛寺に到着し、大勢の人が乗り込んできて五時三十分に出発となった。総勢二十九名ということだった。まだ暗闇の中での出発となった。

ここから長谷寺まで高速道路をまっしぐらに走り続けるようだ。群馬県から離れるころ、ようやく明るくなってきた。途中六ヶ所ほど休憩を取り午後三時近くに長谷寺に到着した。考えていたより遠くに感じる。紅葉が真っ盛りであった。

駐車場から、案内の若手の僧侶が付いてくれて、さすが志田住職の段取りは違うな！と感心しきりに、仁王門に入った。本山境内が一望できる素晴らしい眺めの場所が集合写真用に用意してあった。

『一般の人は立ち入り禁止』の本坊に案内され、茶菓子をいただきながら先達の説明を受け、天皇陛下行幸時の御息所を見学し、さらに撮影禁止の屏風も撮影許可を得たりして、普通では見られない凄いお宝を見学させてもらう幸せにあやかった。廊下に出ると、境内一望の景色に出会い、思わずシャッターを切った。

国宝の本堂で祈祷を受け、高さ10ｍ余りの本尊様、十一面観音菩薩立像を仰ぎ見て、お御足に直接触れてお参りし、ここまで無事に生きてこられたお礼をし、一周させてもらった。初めての長谷寺はじっくりとお参りしたい本山であった。

翌二十二日は女人高野と呼ばれる室生寺へ向かう。太鼓橋を渡り本坊で管長の説明を受け住職の息子さんの案内で境内へ出る。ここも、紅葉がみごとであった。両側に石楠花が群生している石段鎧坂があり、花が咲き誇っている時期に見たいものだと思うものであった。

国宝の金堂を見て時間がないにも関わらず、今回一行の内四人で奥の院へ向かった。石の急階段を走って登り、奥の院で写真を撮り、ここまで来たという証拠の奥の院のお守りを買ってきた。帰りも四人で走ってバスに向かったが、案の定、集合時間に間に合わず、心配と迷惑をかけてしまった。確信犯であった。ここも素晴らしい建物が建っていた。一時間余りの急しい参拝であった。

伊勢神宮へ向かい内宮・外宮と参拝してきた。ここは三度目でしたが、遷宮後のまだ新しい中のお宮を見たかったので参拝できてうれしかった。以前、おかげ横丁で菊一文字の包丁を買った覚えがあったので探したが見つからなかった。しかし、二見ヶ浦のお土産センターで見つけ買うことができた。観世音菩薩かお伊勢様かの御加護があったのかもしれない。夜は鳥羽温泉のホテルで大宴会が催された。皆さんカラオケが上手でした。

二十三日鮮魚センターで注文済みの土産を受け取り、フェリーで豊川稲荷へ向かう。忘れてならないのは、伊勢神宮のバスの中で鮮魚センターの車内販売を行った彼女の喋りのうまさです。買わされてしまうまさがありました。センターの娘さんだそうです。おかげでお土産の買い物が楽にできた。

豊川稲荷では、壮大な建築規模に目を見張り、現在相應寺の本堂建設で、頭の痛い時期でもあり、建設時はどの位の寄付を集めたのだろうかと思わず頭の一隅で計算を始めてしまった。

帰りのバスの中で富士山が見られ、いい旅であったと思いながら寝込んでしまった。建築に携わっている私には、素晴らしい建築物が見られ、又、素晴らしい紅葉に出会え、非常に有意義な参拝でした。参加してよかった。

今回の参拝は龍興寺と相應寺の主催であったが参加人数が意外に少なく、金剛寺住職にご尽力いただき、金剛寺の檀家の皆さんに多数応援いただき催行できました。ありがとうございました。

金剛寺と大前田栄五郎

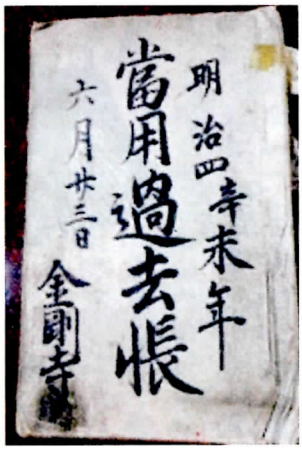
赤城温泉　御宿総本家　東宮　惇允

先月、十月二十五日の夜、苗ヶ島町の金剛寺本堂に於いて、東日本大震災チャリティーイベント「大前田栄五郎誕生二百二十五周年記念・講談（栄五郎の生涯）と歌謡ショー」が金剛寺主催により盛大に催されました。金剛寺は栄五郎の生家、田島家の菩提寺であり、明治七年に亡くなられた折には、住職寛運師が喪主但馬信太郎（妹なおの長男）の依頼により導師を務めております。今回の企画は住職の志田洋遠師と総代の櫻井敏道さんや檀徒役員の熱意により実現されました。昭和四十年代と思いますが、子孫の田島清一郎さん（信太郎の曾孫・元宮城村長、父親の荘次郎も村長を歴任）から聞いた話に、有名な侠客の子孫が一同に集まる会合に出席して来たと…）かつて宮城村時代に栄五郎親分の名を冠したイベントを組もうと企画した事がありますが、その筋の流れを継承する方々がいるので難しいと断念した事を記憶しています。

源　英信筆「栄五郎七十七歳・喜寿の肖像」及び戒名

さて、大前田栄五郎親分に付いては明治の頃より今日まで、本や講談、芝居、映画等々で多くの人々の知るところであります。本稿では概略と寺の過去帳に残る記憶だけに留めました。栄五郎は旧勢多郡大前田村川東の博徒久五郎（亨和元年二月没五十歳）親分の息子として寛政五（1,793）年に生まれました。長兄も父親の跡目を継ぎ「めくらの要吉」親分として近郷在にその名を轟かせており、その様な環境の中で育った栄五郎は幼少の頃より撃剣を好む様な活発な子供で、胸に笠を抱えて走れば、笠が落ちないほど早く「火の玉小僧」と呼ばれていたと伝えられています。若い頃に縄張り争いから兇状持ちとなり故郷を離れ旅人生活が始まります。佐渡に流罪になったあと島抜けした話や、名古屋城下での活躍などが後世の語り草になっております。のちに「天下の和合人」と呼ばれる程の大親分になります。喧嘩の仲裁を依頼される名の有る親分には、和解成立後に、双方から多額の謝礼が送られるとの話をさる親分の息子から聞いた事があります。関八州に多くの賭場を持っていたとも伝えられていますので、それらは喧嘩の仲裁で預かった賭場だったかも知れません。国定忠治との関係もこんな記憶が群馬県誌に記載されています。「嘉永三年（1850）七月、勢多郡大前田村の博徒大前田栄五郎、佐波郡国定村の博徒国定忠治に自決を促す、八月二十四日、佐波郡国定村の博徒国定忠治、関東取締役に捕らえられる。十二月二十一日、博徒国定忠治が信州街道大戸関所で処刑され、（四十一歳）関所付近の住民が警備人足などに動員される」

慶応三年十月には長兄の要吉が八十二歳の天寿を全うします。実家の墓石には子分や関係者とおぼしき七十う有余名の名が刻まれています。要吉の跡目は盲目の親分を側で支えていた田面の深沢祐七（心田院義岳要算居士、大正三年没八十一歳）、が要吉の名前を継承いたします、墓地は雷電山の栄五郎の墓石がある高橋家墓地の一段下にあります。その右横にあるのは栄五郎が跡目にと考えていた田島考松（本名岩崎幸松、慶応三年三月没四十五歳）の墓石です。実家の岩崎家にも墓石があり、栄五郎が建てたと伝えられています。赤城神社境内山道脇右側には天保十二年四月に赤城神社の大禰宜常見長門に献納された石燈篭があり、田島と刻まれ、栄五郎の寄進であると伝えられています。左側には同年七月に田嶋要吉を筆頭発起人とした寄進者五十余名の名が刻まれた灯篭が建っています。かつては御師の門前に建っていたそうですが、明治になり境内に移設され現在に至っております。栄五郎は晩年、大胡町の向屋敷に住み、母キヨ（文政四月没五十八歳）の血筋である高橋家に嫁いだ姪に世話になり余生を送ります。昔、堅気の皆さんにご迷惑を掛けたお詫びにと、近くを流れる川に掛かる大川橋の掃除をしたり、上町から江木方面に足を延ばして街道に落ちている馬糞掃除などをしていたと伝えられ、明治七年、畳の上で、兄と同じ八十二歳の天寿を全うします。金剛寺は役人に追われた栄五郎を寺の庫裏に匿った事があり、その恩義に報いる為に本堂前の石垣を寄進したとの言い伝えが残っています。明治三十四年にそれと思われる石垣を積み直りたり、参道などの大改修がされていますので、寄進からかなり経っていたのかも知れません。



戒名記載の過去帳「金剛寺所蔵」

ただ栄五郎の戒名に使われている「歓」の一字は歓喜院金剛寺の歓の一文字で、それは永代院号として許されているのは、檀家中に一軒あるのみですので、金剛寺に対し特段の功績が有ったと想像されます。明治七年四月十二日（旧暦二月二十六日）「明治五年十一月九日より太政官布告第三三七により旧暦から新暦に変わる。」墓石は旧暦で表記されています。「歓廣院徳壽榮翁居士、大前田村田嶋栄五郎事行年八十二歳」。

兄、要吉は過去帳に「恵善栄果居士・大前田村川東栄五良アニ」と記されています。

前橋東部商工会からのお知らせ　Vol. 11　記載

豊山派

震災復興講談を開催　侠客・栄五郎の生涯

国定忠治と並ぶ上州の侠客、大前田栄五郎（写真）の誕生二二五周年記念・東日本大震災チャリティーイベント「講談《栄五郎の生涯》と歌謡ショー」が十月二十五日群馬県前橋市の金剛寺（志田洋遠住職）で開催された。檀信徒や住民ら約一〇〇人が来場し、人情味あふれる地元の英雄の逸話を堪能した。

同寺は、講談や芝居等で有名になった栄五郎の菩提寺。江戸末期、博徒として活躍していた栄五郎が役人に追われる身となった時、同寺は栄五郎を庫裏に匿ったという。栄五郎はその恩義に報いるため、本堂前の石垣を寄進したと伝わる。

前橋市の初代市長、下村善太郎とのエピソードも面白い。栄五郎が仕切る賭場に姿を現した若き日の善太郎の人相を見るや、栄五郎が一喝。「おめえはこんな所に出入りする人間じゃねえ。江戸に行って一旗揚げてこい！」この言葉をきっかけに更生した善太郎は、生糸の商いで成功。地元・前橋の偉人として、その名を残している。栄五郎の生涯を講談師の宝井梅湯（うめゆ）さんが口演。歌手の岡田しのぶさんが熱唱した。

志田住職は震災後、福島県を度々訪問。その折に中学二年生の女の子から言われた「福島のことを忘れないでください」という言葉が深く心に沁み込んでいるという。

今回のイベントの収益15万７４１４円を、郡山市の「復興応援すこやか子育て寄附金」に1日付で寄付。同市の子どもたちに向け、当日の参加者全員のメッセージ「私達は福島を忘れない」を贈った。同寄附金は、「復興の担い手となる子どもたち」の教育支援事業等に充当される。

週刊仏教タイムス
２０１７年（平成29年）11月9日 記載

栄五郎の生涯迫力ある語り

菩提寺で講談会

江戸末期の侠客、大前田栄五郎の生涯についての講談会が前橋市苗ヶ島町の金剛寺本堂で行われた。講談師、宝井梅湯さんの迫力ある語り＝写真＝に、檀家や地域住民80名が引き込まれた。

同寺は栄五郎の菩提寺。「関東一の大親分、栄五郎の子分は５００人、そのまた子分が３千人」と、梅湯さんの小気味よい語りで、器の大きさやきっぷの良い生きざまを紹介した。

栄五郎が今年、生誕２２５年を迎えたのにちなみ、地元ゆかりの人物を多く知ってもらおうと同寺が企画した。太田市出身の歌手、岡田しのぶさんの歌謡ショーも行われた。

上毛新聞
２０１７年（平成29年）11月5日 記載

豊山派有志が広島法要

原爆慰霊碑前　9条守り核廃絶を

東日本各地から集まった真言宗豊山派の僧侶有志6人が9日、広島市の平和記念公園を訪れ、原爆ドームや平和の灯を望む原爆死者慰霊碑の前で「原爆追善慰霊法要」を厳修した。修学旅行で来ていた中学生らも自然と参列し、一緒に平和を祈念。導師を務めた志田洋遠氏（群馬・金剛寺）は廻向文を読み上げ、「原爆英没者」と「原爆症の苦しみに耐え、他界せられたる霊位」に戦禍の過ちを繰り返さないことを誓った。

有志一行は法要後、平和記念資料館へ。平和学習をしていた鹿児島県の中学生たちと会話を交わすなどしながら見学した。志田氏は追悼平和祈念館の「死没者検索装置」で、「一度も会ったことがない叔父」の遺影と対面。「早稲田大学の学生23歳だったんだな…」と思いを巡らせていた。

さらに「原爆の子の像」の前でも法要。豊山派有志一行と出会った「碑（いしぶみ）案内人」（平和ガイド）の平原敦志氏（市内在住・浄土真宗本願寺派僧侶）は、「党同伐異を脱却し、仏教者は（平和活動で）分かれてはいけない」と意を強くしていた。

僧侶6人で慰霊法要。
修学旅行生らも自然に参列し、一緒に平和を祈念した

広島に豊山派の末寺はなく、参加者全員が平和記念公園内の法要は初。志田氏は、「ずっと念じ続けてきたが、なかなか広島に来ることができなかった。今日、やっと責任を果たせたという思いだ」と述懐。「原爆が投下された時、私は3歳。満州から日本に命がけで引き揚げてくる途中だった。ソ連軍から逃避行の中で母は妹を出産したが、妹はそのまま亡くなった。遺骨は3本だけしか持ち帰れなかった」と振り返り、「その頃、広島では原爆によって乳幼児から高齢者まで大勢の人々が犠牲になっていた…。絶対に戦争だけはいけない。大勢の尊い犠牲と交換に手に入れたのが憲法9条ではないか。平和の尊さを実感するために、各宗派の僧侶資格取得課程の中で広島・長崎・沖縄巡礼を必修にすべきだ」と語気を強めた。

三橋和己氏（千葉・廣照寺）は「核兵器のない世界を実現しなければならない」と改めて決意。潮地龍勝氏（福島・満徳寺）も「同じことを繰り返さないためには核兵器廃絶しかない」と話した。鷲津照仁氏（千葉・最勝院）は「若い人にどんどん伝えていかないといけない」と強調。鈴木克信氏（福島・龍角寺）と神野隆晃氏（山形・善明院）は「皆と一緒にご回向できてよかった」と感慨深そうに話した。

週刊仏教タイムス
2018年（平成30年）5月17日 記載

仏教のあれこれ

ちょっと☆真言宗

お塔婆のはじまり

仏教が誕生したインドでは、お釈迦様のご遺骨を納めたドーム形の塔を「ストゥーパ（卒塔婆）」と言います。お釈迦様がお亡くなりになった後に、お釈迦様を慕う人々がこの塔の前に集まり、供養し礼拝（らいはい）しました。

このような仏塔を建立するのには、多くの資財が必要でしたが、お釈迦様を慕う人々の尽力によって、インド各地に仏塔が建てられました。

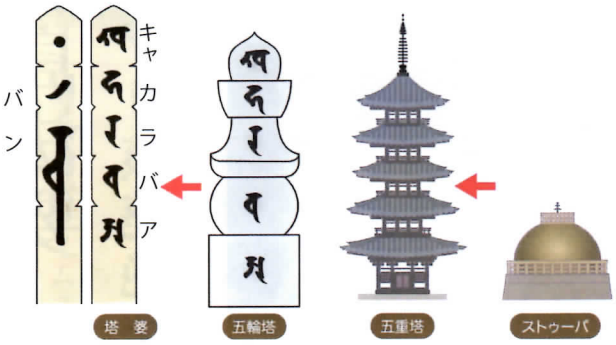
仏塔は人々の信仰のよりどころとなり、いつしか仏塔そのものがお釈迦様だと考えられるようになりました。

その後、仏塔は中国や日本へ伝わると、三重塔・五重塔などの形状に変化していき、様々な塔が建立されるようになりました。

特に真言宗では、五重塔が考案され、今日では、板で形作られ平面のお塔婆が普及したのです。

お塔婆の片面に、この世の一切の存在を更生している五大（空風火水地）の梵字（ぼんじ）「キャ・カ・ラ・バ・ア」を書くことで、胎蔵界の大日如来さまをあらわします。もう一方の面に「バン」の梵字を書くことで、金剛界の大日如来さまをあらわします。

これらの梵字は、大日如来さまの真言でもあるのです。梵字の下に、お戒名が書かれているのは、故人が大日如来さまに抱かれていることを示しています。



金剛寺欄間彫刻十八世紀後半に活躍した黒保根町上田沢出身の彫物師 関口 文治郎有信 作。

本寺を訪れましたら、ご本尊様と欄間をご覧頂けたらと思います。

彫物師 関口文治郎有信 作
二四孝／唐婦人（童子）

撮影：黒﨑 晴夫

彫物師 関口文治郎有信 作
二四孝／楊香と寅

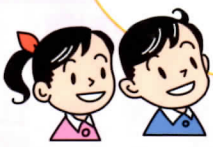
撮影：黒﨑 晴夫

2018年7月2～31日
しののめ信用金庫前橋営業部ロビーにて
金剛寺欄間彫刻の写真展がありました。

庫裏便り

新里町　長岡様からの年賀はがき

第2回
こどもからの教えて！お坊さん



●おばあちゃんが「次の日曜日
おじいちゃんの『えこう』をするからね。」
て言ったのですが、『えこう』てなんですか?

答）おぼうさん　すこし　むずかしいけれど、かんたんに言えば、「よいことをすれば、よいことがまわってくる…　て事かな。

大人の皆様へ
『回向』とは差し向けるという意味です。仏教では善行を施すと自分に帰って来るろといわれそれを他の人達に差し向けるのです。法事をすることは善行です。その功徳を故人に差し向け安穏に過ごせるよう念じるのです。

手造りのお地蔵様

平成三十年 回忌一覧

一周忌	平成二十九年
三回忌	平成二十八年
七回忌	平成二十四年
十三回忌	平成十八年
十七回忌	平成十四年
二十三回忌	平成八年
二十五回忌	平成六年
二十七回忌	平成四年
三十三回忌	昭和六十一年
三十七回忌	昭和五十七年
五十回忌	昭和四十四年
百回忌	大正八年

追善供養は毎年ご命日に行うのが本義です。
この一覧表は、一般的に行われている年回表を表したものです。

ソメイヨシノ　樹齢120年　明治31年植樹

行政相談

行政相談委員は、総務大臣から委嘱されているあなたの身近な相談相手です。

定例相談

場所：宮城支所

日時：毎月十八日
※土日のとき、翌月曜日
十三時～十五時

担当委員：志田 洋遠

【無料・秘密厳守】
学校（教育）のことでもなんでもOKです。

一人で抱えず話してくださいませんか？

法話

袖ふれあうのも他生の縁

有名な言葉ですから、大勢の人達が理解されているかと思いますが、「他生の縁を多少と勘違いされておられる方が、意外に多いのには驚かされます。

現代では着物姿の方が珍しく、袖が触れあうことは稀です。

この意味を簡単に言えば『出会いの不思議さ尊さを』を表現し多い少ないでは無く『縁は異なもの味なもの』なのです。

住職からのおすすめ本

題　名　身近な人が亡くなった後の手続きのすべて
著　者　児島 明日美・福田 真弓・酒井 明日子
発行所　自由国民社
定　価　1、400円＋税

題　名　年金・医療保険・介護保険のしくみがわかる本
著　者　三宅 昭彦・深澤 理香・三平 和男
発行所　法学書院
定　価　1、600円＋税

題　名　老人の取扱説明書
著　者　松平　類
発行所　クリエイティブ株式会社
定　価　800円＋税

題　名　子育て明日への言葉
著　者　各宗派僧侶
発行所　（公財）全国青少年教化協議会編
定　価　300円税込

寺庭　すいれん

編集後記

平成十六年に、創刊号を出させていただいて、本年で十三号を発行させて頂きます。皆様の暖かいご支援とご協力に唯々深謝申し上げます。

昨年は「大前田栄五郎生誕二二五年」を記念して、『講談会・歌謡ショー』を企画させていただきました。

当山役員の方々及び檀信徒各位の積極的な御協力を頂き無事に済ませる事が出来ました。心から感謝申し上げます。

『金剛寺ホームページ』も、51、800名以上のアクセスがあり、地方寺院ホームページとしてはアクセス数が多いと思われますので、更にアクセス者の増加を願って精進したいと考えておりますので御高覧お願い致します。

今号表紙は、白衣観音で有名な『高野山真言宗慈眼院』住職 橋爪 良真 師に御執筆を御願いさせて頂きました。

次に、総本山長谷寺・室生寺三ヶ寺（龍興寺・相應寺・金剛寺）合同参拝について、相應寺責任役員　石井　一義様に投稿戴きました。

続いては、当山責任役員　東宮　惇允様に、前橋東部商工会報に寄稿された『金剛寺と大前田栄五郎』を掲載させていただきました。

又、この『寺報』を御覧いただき、丁重なお葉書をお送りいただきました。医王寺住職　長橋　良道師には、過分なるお言葉をいただき心震える思いです。

末筆になりますけれど、毎年心ある年賀状をお送りくださる長岡ご夫妻（進・敬子）に唯々感謝です。これからも様々な方に執筆をお願い致し、且つ皆様のご投稿を伏せてお願い致します。

合　掌